



地域の記憶をつなぐために : 香美町無住化集落の場合 (〈特集〉地域歴史遺産を未来につなぐために : 阪神・淡路大震災と、地域の取り組みから考える)

石松, 崇

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 12:33-48

(Issue Date)

2020-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012598>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012598>



地域の記憶をつなぐために——香美町無住化集落の場合——

石松 崇

一 はじめに

兵庫県美方郡香美町は、兵庫県北部但馬地方の北西、北は日本海、南は氷ノ山山系に囲まれた町である。西は美方郡新温泉町、西南は鳥取県若桜町、東は豊岡市、南東は養父市に接している。総面積は三六八・七七平方キロメートルで、町としての面積は兵庫県内では一番広い。

沿岸部はリアス式海岸で、美しい自然景観が広がっている。周辺は国指定名勝香住海岸、国指定名勝天然記念物但馬御火浦、国指定天然記念物鎧の袖、山陰海岸国立公園に指定され、また山陰海岸ユネスコ世界ジオパークに認定されている。

内陸部は一〇〇〇メートル級の山々に囲まれ、四〇〇〜七〇〇メートルの高原、段丘、谷底平野からなり、林野は約

八六%を占める。山間部では県指定天然記念物吉滝、県指定名勝猿尾滝、県指定天然記念物池の大カツラ、兎野野の大カツラ、小城のブナ原生林、小長迫の大トチなどの豊かな水と巨樹巨木が山々を特徴づけており、氷ノ山後山那岐山国定公園、但馬山岳県立自然公園に指定されている。

二〇〇五年に、氷ノ山山系を源流として北流する矢田川沿いの三町、城崎郡香住町、美方郡村岡町、美方郡美方町が合併して香美町が成立した。

合併当時は人口二一四三九人、世帯数六六三〇戸であったが、二〇一五年には人口一八〇七〇人、世帯数六二二八戸に減少しており、過疎化・少子高齢化が喫緊の課題となっている。

過疎化・少子高齢化によって失われつつある地域の歴史文化遺産に対して、文化財保護の立場からどうすべきなのか。少子高齢化にあえぐ地域においては観光振興に偏重した文化財の活

用は、人材・資金の面から非常にハードルが高い。近年、限界集落やむらじまいなどのキーワードを耳にする機会も増えてきており、文化財保護の立場から「方針」とまではいかないまでも方向性を示す必要があるのではないかと感じている。

本稿では、香美町の現状と今までの取り組みを報告し、日本全国でますます増えていくであろう「むらじまい」に対して、文化財保護がどうあるべきかを考えるための一助となれば幸いである。

二 香美町の現状と人口ビジョン

二〇〇八年に始まった日本の人口減少は、加速度的に進み、経済規模の縮小や社会保障費の増加、コミュニティの弱体化等地域社会に大きな影響を及ぼす恐れが強いことから、国は二〇一四年に国と地方が地方創生・人口減少克服に取り組むため「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン（人口ビジョン）」及び「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。香美町においてもこれを受け、長年にわたって続いている人口減少がさらに加速度的にすすむ時代を迎えることから二〇一五年に「香美町人口ビジョン」を策定した。

その後、四年あまりが経過し国では「人口ビジョン」及び「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の改定をすすめている。香美

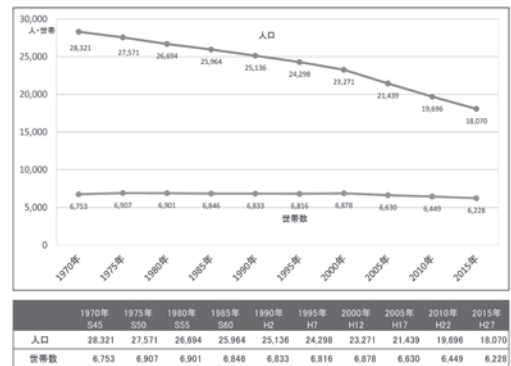


図1 人口・世帯数の推移

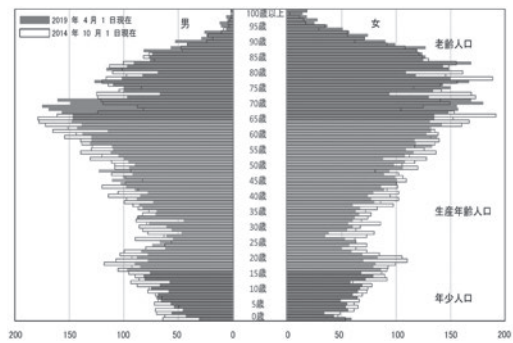


図2 年齢別人口

町でも「香美町総合戦略」の計画期間が二〇一九年度末を持って満了となることから、二〇二〇年度以降の更なる地域活性化の展開に向けて次期六カ年の香美町総合戦略の策定に向け、近年の人口動態や人口減少を踏まえて「香美町人口ビジョン」の改定をおこなった。

香美町の人口は、長年減少を続けており、特に二〇〇〇年以降の減少率が著しくなっている。世帯数についても一九七五年をピークに横ばいから減少傾向にある。二〇一五年の人口は一八〇七〇人となり、二〇一〇年から五年間で一六二六人減少している(図1)。

年齢別人口では若者転出により「二〇〜二四歳」が少なく、

また、子どもについても年齢が低いほど人数が少なくなっている(図2)。

「五〜一四歳」の子どもの二〇年後の定着率は低下傾向がみられ、一九九五年の「五〜一四歳」と二〇年後の二〇一五年の「二五〜三四歳」を比べた定着率は四割強となっている(図3)。

自然動態は、若い世代の減少に伴い出生は次第に減少し、高齢化に伴い死亡は増加しており自然減が進んでいる(図4)。

合計特殊出生率は

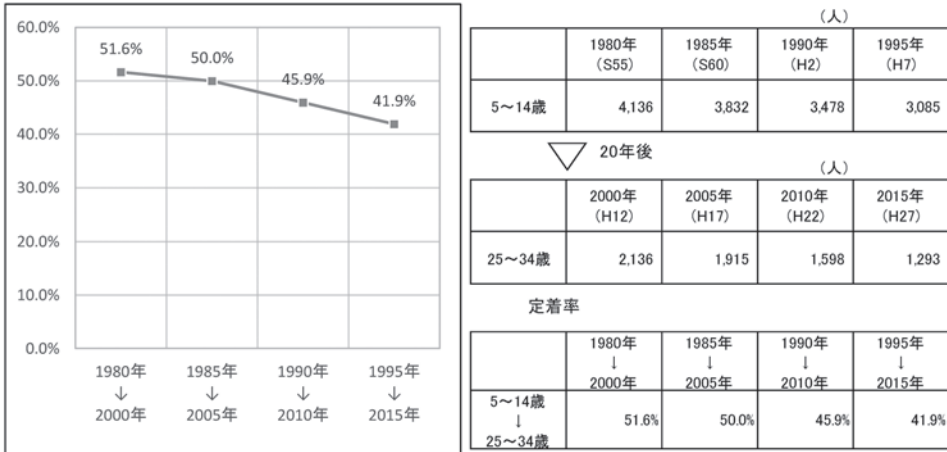


図3 子ども(5~14歳)の20年後の定着率の推移

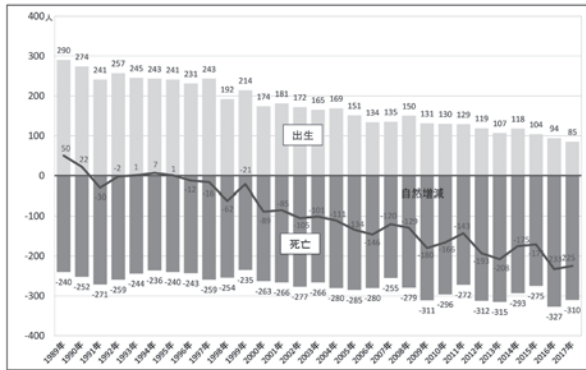


図4 出生数、死亡数、自然増減の推移

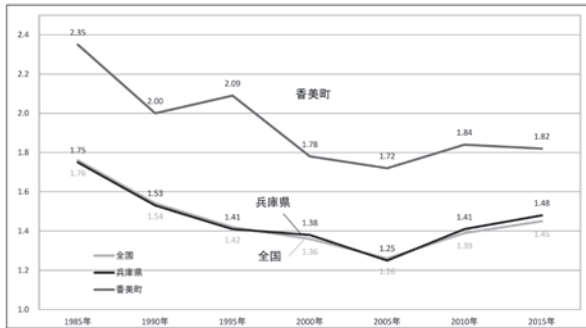


図5 合計特殊出生率の推移(1985~2010)

一九八五年には二・三五という高い数値であったが、二〇〇五年一・七二、二〇一〇年一・八四、二〇一五年一・八二と横ばいである(図5)。全国的にみれば高い数値であるが、若い世代が減少しているため少子化が進んできている。

社会動態は転入・転出ともに縮小しながら、転出が転入を上回る転出超過が続いている。転出超過の数としては増加していないが、人口が減少しているため人口に対する割合は大きくなっていくため、結果として人口減少が加速している(図6)。

転入・転出人口の年齢別では「二五〜一九歳」「二〇〜二四歳」

「二五～二九歳」の転出超過が著しく、転入超過は僅かな世代となっている(図7)。近隣都市との転入・転出では豊岡市との関係が一番大きく、他府県では大阪府への転出超過が著しくなっている。

これらの自然動態と社会動態を合わせた人口動態は一九九一年に死亡が出生を上回る自然減となり、以降その動きが進むとともに、転出が転入を上回る社会減が続いている。近年はさらに、死亡が転入を上回って人口減少が進んできている(図8)。

このような人口の推移を踏まえ『人口ビジョン第2版』では、

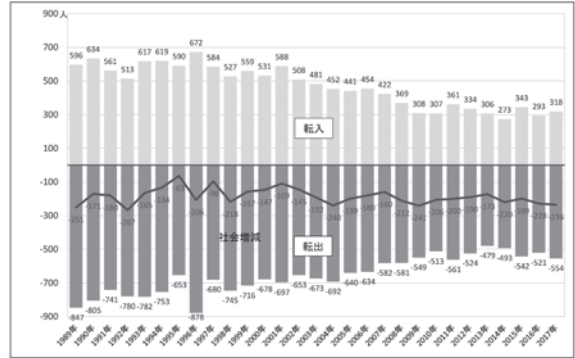


図6 転入数、転出数、社会増減の推移

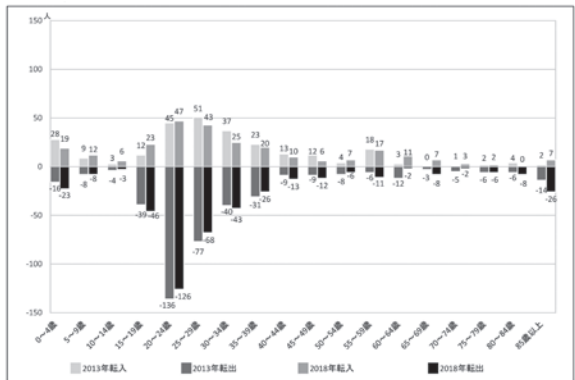


図7 年齢5階級別の人口移動

香美町の人口の動きの特徴として ①人口減少の加速化 ②若い世代の転出 ③高齢者の厚い層 ④合計特殊出生率の高さ

⑤近隣市町・近隣府県への転出超過 ⑥合計特殊出生率の高さ

口減少が町に与える影響として四つの項目と一七の小項目が挙げられている(別表)。

これらを踏まえ、人口の将来展望を示している(図9)。パターン1は国立社会保障・人口問題研究所による将来推計人口で、合計特殊出生率を1.706～1.767で推移、社会増減は二〇一〇～二〇一五の転入・転出の平均値が継続すると仮

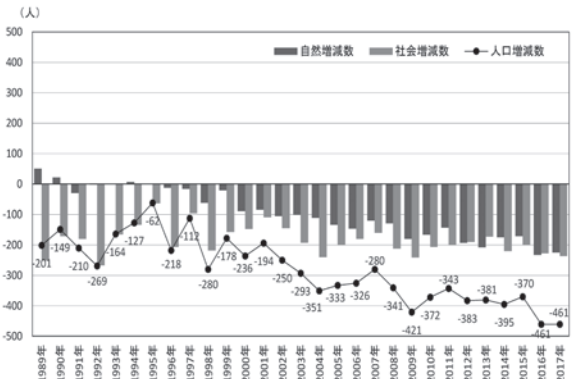
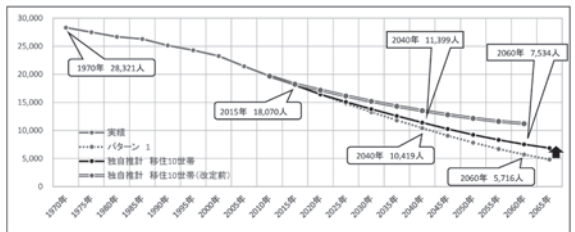


図8 自然動態・社会動態の推移



	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年	2065年
実績	18,070										
パターン1	18,070	16,411	14,805	13,283	11,815	10,419	9,076	7,820	6,706	5,716	4,833
独自推計 移住10世帯	18,070	16,449	15,067	13,810	12,581	11,399	10,271	9,227	8,319	7,534	6,855
独自推計 移住10世帯(改定前)	18,252	17,180	16,148	15,201	14,316	13,540	12,811	12,161	11,625	11,215	

図9 人口の将来展望

別表 人口減少が町に与える影響

- ①住民生活について
 - ア. 子育て世帯の孤立化が進む。
 - イ. 医療・介護需要が増大し、多様化する。
 - ウ. 人口減等により消費減になり、商店、企業など民間施設が減少する。
 - エ. 地域の伝統や文化が失われる。
 - オ. スポーツ・文化・娯楽等余暇を楽しむ機会が減少する。
 - カ. 空教室が増え、学校の存続が危ぶまれるようになる。
 - キ. 高齢者・単身者など、住宅のニーズが多様化する。
- ②経済・雇用について
 - ア. 労働人口の減少等により地域産業が衰退する。
 - イ. 農業・水産業をはじめ、中小企業等の後継者不足が進む。
 - ウ. 農家の高齢化や廃業が進む。
 - エ. 漁業者の高齢化や廃業が進み、漁船が減少する。
- ③地域づくりについて
 - ア. 地域を支える担い手が高齢化し、地域活力が低下する。
 - イ. ボランティアの人材が不足するようになる。
 - ウ. 空地・空き家が増加する。
 - エ. 担い手の減少により農地・森林の荒廃が進む。
 - オ. インフラの需要が変化し、老朽化が進む。
- ④行政サービスについて
 - ア. 税収減になり、行政サービスの低下が危惧される。

定し、二〇四五年には人口四八三三人になるとされている。表中の「独自推計移住10世帯」は、香美町では合計特殊出生率が二〇一五年で一・八二に達しているため、二〇六五年には二・二一になると仮定、社会増減は二〇一〇〜二〇一五の転入・転出の平均値が継続すると仮定し、移住世帯は二〇〜二四歳が夫婦二人子ども一人、二五〜二九歳は夫婦二人子ども二人の四大家族が毎年一〇世帯移住すると仮定したもので、二〇六五年には六八五五人になるとしている。「独自推計 移住10世帯(改定前)」は前回の人口ビジョンで示した将来展望である。

この人口推計では合計特殊出生率が現在よりも一・二一四倍の二・二一、移住世帯が毎年10世帯で推移しても人口は二〇一五年の三七％に激減することは避けられないことが示されている。香美町には一二〇集落があるが、人口が激減して存続が危機的状況となる集落もある。いったいどのくらいの集落が危機的な状況になるのか、かなり雑な計算方法だが試算してみる。それぞれの集落によって一世帯あたりの人数にばらつきがあるため、集落ごとに人口を世帯数で割って、一世帯平均人数を計算した。さらに集落の人口に減少率をかけ、先程の集落ごとの一世帯平均人数で割って、二〇四五年の推定世帯数を算出した。本来は高齢化率等も考慮すべきだが省略したため、かなり見通しが甘い数値である。

集落としての機能維持が困難になるとされる世帯数五戸以下となる集落は香住区四七集落のうち七集落で一四％、村岡区五二集落のうち六集落で一％、小代区二一集落のうち四集落で一九％となっており、香美町全体では一七集落が維持することが困難となる可能性がある。

三 香美町の無住化集落

香美町ではすでに居住の実態がない集落がある。

■香住区本見塚

香美町香住区本見塚は香住区の東、峠を超えると豊岡市竹野町に至る集落である。現在は本見塚の北西にある枝村のカヤノが本見塚とされている。本見塚は標高約二三〇メートル、カヤノとの標高差は約一七〇メートルである。元の本見塚では当時の住宅はすでに朽ち果てており、本見塚出身の方の農作業小屋などが置かれている。また集落内には大倉神社本殿が残されている。香美町歴史文化遺産活性化実行委員会、香美町教育委員



廃村前の旧本見塚村

会が実施した寺社建築調査によると、廃村になっているため痛みも大きいですが、細部に独特の意匠をもった佳作として評価されている。

元和年中（一六一五～一六二四）に越前三国港の船が佐津川に水を汲みに寄り、地内の弘仙山に銀鉱の露頭を発見、出石藩主小出大和守の代に二〇数年に渡って金銀を産出したと言われている。坑内で出水したため宝永年間に

廃坑となったとされているが、出石藩が採掘を中止してからも採掘していたようで、享保二〇（一七三五）年から元文三（二七八三）年にかけて灰吹銀が豊岡市竹野町に持ち込まれていた。明治一五（一八八二）年には東京の古河市郎兵衛が採掘し、二千人余が従事していたが明治二六（一八九三）年には廃坑となった。

地内に大倉神社があることから木地師との関連、また平家伝承を語り継いでいた村でもある。

昭和三〇（一九五五）年に奥佐津村と香住町が合併した。その頃の本見塚村には五世帯三二人が住んでいた。翌三一年には電気が開通し、これをもって旧香住町の無電灯集落から解消された。しかし、地すべり地帯であり、災害となり合わせの生活であったことから離村がはじまったとされている。一九六五年には土生と本見塚の子どもたちが通っていた奥佐津小学校土本分校が奥佐津小学校と統合し、閉校となった。一九六八年二月三日本見塚村廃村の際には二世帯五人となっていた。当時の香住町報では離村の記事の最後を「現在の行政の力ではどうすることもできなかつた厳しい過疎の現実をまざまざ見せつけられたものです。」と締めくくっている。

■村岡区小城

村岡区小城は村岡区山田の南にある山田集落の枝村である。



小城（大切）

標高は約五三〇メートルで山田との標高差は約四〇〇メートルある。集落の東の峠を越えると豊岡市日高町に至る。小城の周辺には大切、本谷、広久、小畑の小規模集落が点在しており、それらをまとめて小城と呼んでいる。当集落にも平家伝承が残されており、集落が点在しているのは、襲撃を受けた際に他の集落が見えないようにするためと言われていた。

本村の山田では天正一七（二五八九）年から宝暦三（二七五三）年まで鉄山で賑わった。産出した鉄は山田鉄の名で知られ、鉄のほか金銀銅なども産出したという。一時は千軒を超えたと

言われるが宝暦三（二七五三）年に幕府が鉱山を直轄するとの噂がながれたため閉山したという。明治末頃にあらたに採掘がはじまったが昭和二一（一九四六）年には外国からの輸入が増えて採算がとれなくなったため閉山している。

小城にも木地師が

入ってきており、山中には木地屋敷跡や木地師墓石が伝承されている。

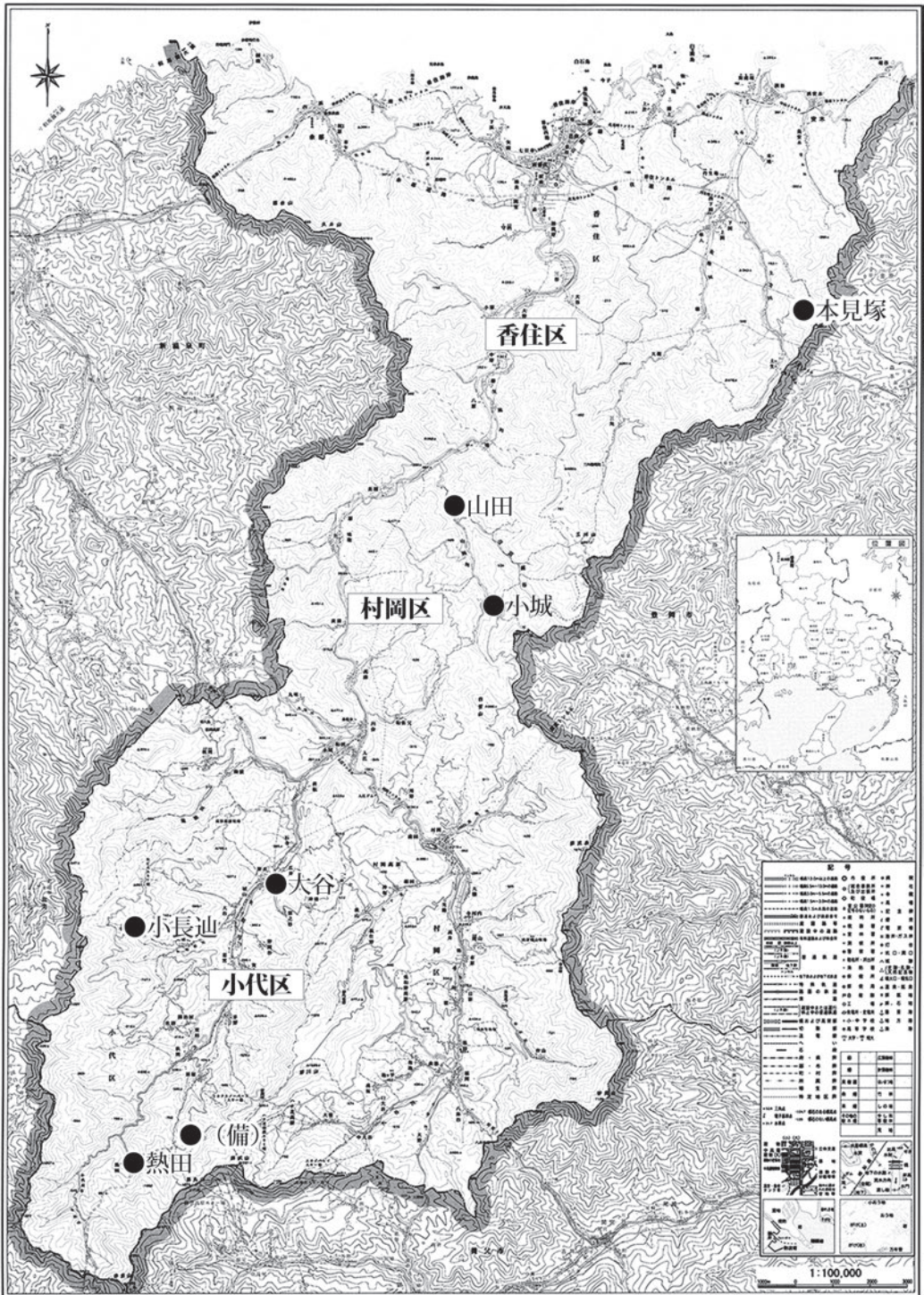
近代以降は、水田、焼畑、養蚕、炭焼、酒造出稼ぎ、和牛、商店などの仕事があつたが、林業に携わる人は少なかった。林業に携わる人々は主に県外からの出稼ぎ労働者で一〇〇人を超える人々が働いていた。これら人々も木材価格の低迷などで次第に減少していった。

昭和三〇（一九五五）年には二三世帯一三五人が暮らしていたが、二五年たった昭和五五（一九八〇）年には一四世帯二二人に減少した。子どもの進学や若者の就職などで減少がすすみ、残された人々は協議を重ねて集団移転を決定した。町では射添地区内での移転地を探し、和田地内の国道九号線の近くに用地を確保し、国県の「過疎地域集落整備事業」の適用を受けて移転住宅を建設した。昭和五九（一九八四）年の秋に移転住宅が完成したため、移住を開始し翌六〇年の正月は移転先で迎えた。

■小代区熱田

小代区熱田は香美町の最南端の集落で北東にある新屋村の枝村、鳥取県若狭町に抜ける峠道沿いの集落である。標高六〇〇メートルで小代区の中心の大谷との標高差は三七〇メートルである。

伝承では尾州熱田大宮司の次男が従者を連れて信州田野に逃





熱田 観音堂

れ、さらに熱田に逃れて土着したと伝わる。最初に移り住んだ場所を熱田、後に東の谷に移りそこを田野、従者の居所を小子と呼んだ。応永年中（一三九四〜一四八二）に金銀銅鉄の採掘が盛んで田野千軒、小子千軒と呼ばれるほど栄えていた。しかし天文九（一五四〇）年に大洪水により山崩れで荒廃、今の新屋に移り住んだと伝えられている。当地には木地師の伝承も残されている。

熱田は但馬牛の聖地ともよばれ、熱田で生まれたあつた蔓は現在の黒毛和牛の祖とされており、遺伝子調査では全国の黒毛

和牛の九九・九%がその血を引くことが証明されている。

昭和四三（二九六八）年二月一四日、降り続いてきた雪がやんだため主婦六人が大谷まで買い出しに行くこととなった。無事買い出しは済んだが、昼ごろから再び雪が降りはじめたため急いで帰ろうとした。熱田への分かれ

道である熱田出会のところにあつた小屋にいたのが夕方五時ごろのことであつた。休憩を少しして、荷物をおいて帰るかここで一泊するか相談したが結局帰ることになった。しかし、集落の手前まで来たところで、雪崩が発生し全員が生き埋めになってしまった。五人はなんとか自力で這い出てきたが、最後の一人が見つからず、救援を呼ぶため熱田まで戻ったのが八〜九時であつた。それから警察と消防に連絡したが、警察と消防が現場に付いたのは深夜二〜三時であつた。救出されたがすでに亡くなっていた。子どもの教育の問題や医者の問題で熱田での生活に限界を感じていた住民にとって、この一件が離村の直接のきっかけとなった。

離村の話し合いでは古老は「わしらが死んでからにしてくれ」と抵抗したが、全住民九世帯約五〇人が集団移転を決めて、翌四四年に小代区野間谷に建設された越冬住宅に移り住んだ。当初は越冬住宅ということで夏は熱田に冬は野間谷にということであつたが、子どもたちの学校や生活の便の良さから野間谷から戻ることにはなかつたという¹⁾。

■小代区小長辿

小代区小長辿は小代区大谷の西、標高約六五〇メートルで大谷との標高差は四〇〇メートルある。元は大谷の枝村であつた。大谷と小長辿との間の久須部には久須部鉾山があつた。開坑

は室町時代の末、田公氏が採掘していたと言われている。江戸時代には休坑していたが、一説に慶長年中に稼働していたとの説もある。明治の末頃に再び採掘がはじまり、昭和になってから大規模化し精錬も行っていった。最盛期には五〇〇人程度が働いていたが、昭和二〇（一九四五）年代に閉山した。

昭和三〇（一九五五）年代は世帯数一四〇一五で推移しており、県の小代地区民俗資料緊急調査の際には一五世帯七一人が暮らしていたようである。

昭和二〇（一九四五）年には固まった古い雪の上に新雪が積もったため雪崩が発生し、三軒が飲み込まれ九人の命が奪われた。戦後は昭和三八（一九六三）年の豪雪、不慮の事故が続く、道路がよくなくなったことにより通い農業が可能になったことなどから、次第に離村がはじまる。

昭和四一（一九六六）年には二戸、四二年四戸、四三年三戸、四四年五戸と離村が進み、最終的には四六年の越冬住宅の完成をもって移住が完了した。

香美町内ですでに無住化している集落を四箇所紹介した。共通する点がいくつかあるので気になった部分について触れておきたい。まず、地域の中心集落からの標高差があることがあげられる。これは交通手段が整備されていない場合、通学や通院などが大変であり廃村・離村の強い動機となる。小長辿では交通手段が整備されたことが離村のきっかけの一つとなった。今

回の報告の際にあらためて見直して気づいた点が、どの集落とも近隣に鉱山があること、木地師の伝承を持つことである。どの集落も近隣の鉱山の稼働により多くの人が移住、小城においてはさらに林業に携わる季節労働者の流入があり一時的に地域の経済活動が拡大した経験をもっている。廃村の直接的な原因ではないかもしれないが、一つの仮説として鉱山が閉山した際の労働者の転出による地域の経済活動の急激な縮小、賑やかさから閑散へと急激に変化することにより、地域が一気に衰退していくことがあるのではないだろうか。

四 地域の記録

過去に香美町内において調査報告書や地域の方が編纂した冊子が刊行されており、それらをいくつか紹介したい。紹介するにあたって二つに分けて紹介する。本項「地域の記録」では、学術的調査もしくは地域の方が自主的に記録したものを、次項「地域の記憶」では主に聞き取り調査を主としたものを紹介する。

■ 『小代 小代地区民俗資料緊急調査報告書』 兵庫県教育委員会 一九七〇

兵庫県教育委員会が実施した調査で、関西大学柴田実教授を

団長とする一七名の調査団が調査をおこなった。調査範囲は小代区熱田、小長迪、備、新屋、神場を中心として旧美方町全域にわたるものである。

序説で柴田教授は「われわれは昨年度、生野ダム築成のために水没する上生野地区のために、その伝えてきた生活・文化（民俗）の調査を行なって、これを能う限り記録の上に留めることに努めたが、但馬地方における過疎の村もまた、それが今まで持ち伝えた生活・文化が、まさに時代の波の下に没し去ろうとしている点においては水没農村と異なるところない」とし、「離村の原因は、敢えて今日の経済成長の影響にのみ帰するのは当たらない。」「現代人の疑問はむしろ率直に、どうして今までそんなにまで不便な土地に、人々は住んで来たのか、と言う点に向けられるであろう。」とされている。

本報告書は当時の小代について民俗学的見地から丹念な調査が行われており、地理的環境、歴史的環境、社会生活、生業、狩猟、人の一生、年中行事、民具、衣食住、食生活、伝承、方言、民家と多岐にわたって記録されている。なかには現在すでに途絶えてしまった民俗行事も記録されており、近年改めて地域の方に聞き取り調査をしても憶えている方がおられない行事もあった。

あとがきでは熱田分校の閉校式の様子に触れたあと、「過疎の嵐の中で、この地域は今後どのように変化して行くのか。こ

の報告書が、高度経済成長の波の中でゆれ動く平和なふるさとを、長いわが国の歴史の一齣として、後世に伝えてくれることを切に願っている。」と結んでいる。

■『郷愁 小長迪』 小長迪の記録を綴る会、美方町一九九五
小長迪出身の方で組織された小長迪の記録を綴る会による冊子である。小長迪としては昭和四六（一九七一）年に大谷の越冬住宅に移住していたが、一九九二年に小長迪区と大谷区の合併を機に地域の方々が小長迪の記録を編纂したものである。

冒頭で編集委員長を務められた稲尾実氏は「この小冊子は、孫、子に伝える後世に残る資料です。一つの時代が終わって、また、新しい時代を開く、明るい街づくりの土台として、そして、それぞれの心の一隅に思い出を留める糧としてお役に立つことができると念じています。」としている。当時の町長井口利次氏は「そのふるさと小長迪が消えて行く。現代の社会構造や経済は、山村に生まれた人達をそこに定住させる力を持たないという証明だろうか。」とし「記憶のなかにだけ生きることになる小長迪を、文字に残そうとして編まれたこの小冊子が、永く保存されることを希う。」としている。

本書は地域の人々が自らの地域の歴史を書き残そうとしたものであり、小長迪の暮らし、村おこしへの取り組み、離村の経緯、廃村について記されている。前述の県民俗調査報告書と比

較すると網羅されているわけではないが、地域に暮らした人々、そして離れざるを得なかった人々の思いが記されている。

■『小城追憶』香美町歴史文化遺産活性化実行委員会、香美町 二〇一四

小城は昭和五九（一九八四）年から移転住宅に移住していたが、何軒かは小城に通い農業をしていた。しかし、高齢化により放棄される田畑も増え、それに伴って家屋も手つかずとなっていた。

小城区の区長に会った際には地域誌をつくりませんか、と話したこともあったが当時の生活を知る人が高齢化しており、聞き取りも難しいとのことであった。

二〇一四年は何年かぶりの大雪で、春に雪が消えた際に郷土史家古川哲男氏が小城を訪れた際、家屋が雪により倒壊していたことから地域の記録を残さなければと、香美町教育委員会に相談に来られたことがきっかけで取り組むことになった。

はじめに古川氏は「このままでは、何れ旧小城の住居は消滅するであろう。荒れた耕地跡や屋敷跡だけが残されるであろう。集団移転後三〇年を迎えようとしている時、小城のことを知っている人がいる間に、関心がある有志の力を借りて、小城集落のことを記録して残すことにした。」と刊行の動機を記している。

古川氏が小城の移り変わり、小城での生活、小城の鉾山と木地屋、小城の自然と今として小城の歴史と生活を概説している。第五章の小城随想は小城出身の方の随想や聞き取りが掲載されている。

小城追憶の作成中に、昭和六〇年頃に実施された「小城市俗調査報告書」の原稿が見つかった。調査は武庫川女子大学教地主番氏と佐々木泰彦氏による共同調査であった。ほぼ原稿は完成していたが、ページ番号や図表の位置が示されていない資料も同封されており、文脈から判断して編集した。地主教授のご遺族の許可と、佐々木先生の承諾を得て掲載している。

五 地域の記憶

本項では、主に聞き取り調査を主としたものを紹介する。

■『おじろに生きる』美方町産業課 美方町4Hクラブ（農業青年クラブ） 一九八四

美方町4Hクラブの会員が町の産業振興と活性化を図るために、過去を知ることが大切と感じ、4Hクラブの事業として取り組んだものである。聞き取り調査ではある程度のテーマを決めているが、話者もかなりリラックスしている雰囲気は紙面からは伝わってくる。個人の生活史の他、牛飼いのこと、青年活

動などそれぞれに携わった人々の生々しい思いがのこされている。女性の聞き取り調査も行われており、女性視点からの村の生活が記されている。

熱田の小椋勝元氏の聞き取り調査では熱田の生活についての他、電気との戦いというタイトルで電気を通すまでの苦勞が語られている。美方町役場、関西電力、通産省などと交渉を重ね、苦勞の末電気が通った経緯が述べられている。当時の地域の人々にとって電気が通って電灯がつくことが、どれほど待ち焦がれたことであつたかを知ることができる。

但馬牛についても多くの聞き取り調査を行っている。牛を家族のように大切にしたこと、小学生になつて学校から帰ると放牧場にいかなければならなかつたこと、牛追いの苦勞などが語られている。

■『昔風と當世風 兵庫県美方郡香美町岡区相岡地区合同調査特集』 古々路の会 二〇一八

民俗学研究会である古々路の会の第四回合同調査で村岡区相岡が調査対象となつた。調査は二〇一七年八月一九〜二二日までで、会員三二名が地元住民約四〇名に聞き取り調査を行った。

早川美奈子氏による「女性の労働」では相岡の三人の女性から聞き取りをしている。早川氏は「三人とも相岡生まれの相岡

育ち、嫁ぎ先も相岡で閉鎖的な空間の中で同じような人生かと言うと、決してそうではない。娘として、嫁として、母として三者三様の人生がありました。箱入り娘かと思いきや、意外と外に出ている、行動的だと言うのが率直な印象です。」として、地域で生まれ育つた女性の一面を記している。

むらき数子氏による「相岡へき地保育所」では阪神間出身の女性の聞き取りをしている。都市の勤め人家庭での暮らしが、



古々路の会による聞き取り調査

空襲でお父様が亡くなり家も焼失してしまい、射添村で全く異なる暮らしをする事になったこと、その体験は誰にも話したことがないことなどが語られており、聞き取り調査によって、戦中戦後を生き抜いた女性の経験や記憶が記されている。

この古々路の会の調査はライフヒスト

リーの聞き取りや地域の歴史や住宅や移住など多岐にわたり、相岡の魅力を掘り起こすために非常に有効な方法であると実感した。

六 モノの記録とヒトの記憶

地域の記録では主に学術的な調査及び地域の人々による郷土史、地域の記憶については他者による聞き取り調査による報告書・冊子を紹介した。

私が文化財担当者として地域の歴史文化遺産をどのように伝えていくかを考え、取り組んだのが「ふるさとマップ」や「ふるさとガイドマップ」であった。ふるさとガイドマップの編集では地域から推薦を受けた編集委員と内容を詰めていくのだが、携わるたびに思っていたのがこの編集委員会がもつとも面白いということである。地域のことをある程度知っている人が集まり地域の昔話に花が咲く、そのなかで「ああ、そうだったな」「いやいや」などと記憶が整理されていく過程を興味深く聞いていた。また、「そうだったっけなあ」と遠い目で昔を思い出しながら話す昔のまつりの様子や村の様子を聞くことがとても面白かった。夏の暑さや冬の寒さ、日々の生活の大変さなどは文章にしてしまうと、とたんに魅力がなくなってしまう。なかなか、その生活感、言ってみれば「どろくささ」を表現したい

と考えている。

地域の記録は、学術調査や地域の人々による郷土史であるため、ある程度の客観性を意識しながら書かれている。また、記述する対象は民俗学的な分野であったり、特定の出来事であったりする。それを客観的視点から記録することによって普遍的な価値を見出そうとするものである。これに対し地域の記憶については、聞き取り調査であることから個人の主観的視点からの記憶である。これは個々の人間の価値観に左右され、人によって対象が違っていたりする。小城追憶で生活に根ざしたスキーマのシチュエーションに感動した話や、熱田で電気を通すために関西電力まで出向き「関西電力は備、熱田にどんな恨みがあるか」と啖呵を切る話などは、聞き取り調査やそこで暮らした人でなければ、なかなか文章化されない話であろう。主観的視点の多様さにも価値があり、「どろくささ」を表現することができるのではないだろうか。

地域の歴史文化遺産を伝えていくためには、客観的視点からの記録「モノの記録」のみならず、主観的視点からの記憶「ヒトの記憶」をしつかりと残していくことが必要である。

七 おわりに

今年の一月二一日の毎日放送で限界集落や消滅集落に関する

ニュースが放送された。このニュースはSNSなどでも取り上げられ、ニュースに対して投稿されたコメントの一つに「誰しもが土地に縛られる必要はない。自分が望む土地に住めば良い。集落が消滅するのであればそれはその土地に魅力がなくなつたからである。狩猟民が移動するのと同じだ。農耕していたから定住しただけで農耕を辞めてしまえば土地を捨てて移動してもかまわない。それが人として自然な事だ。悲観的になる必要はない」というものである。確かに一箇所に定住し続けること歴史的にも珍しい。多くの集落、都市にしても中心部は移転するものであり、一箇所にとどまり続けることはあまりない。しかしながら、このコメントでいう「土地の魅力」とはなんだろうか。間違いなく過去において魅力を有した時期があり、人々をひきつけ、そして魅了された人々が定住していたはずである。魅力が忘れ去られてしまった、もしくは今の私達がその魅力を測る価値観を持たないがゆえに放棄されたり消滅したりするのではないだろうか。

地域の魅力を紐解くにはそこに暮らした人々の価値観、「ヒトの記憶」を丹念に集める必要がある。その上で自然的、社会的背景を把握し「モノの記録」と「ヒトの記憶」を統合することにより地域の実態が将来に伝わり、「現代人の疑問はむしろ率直に、どうして今までそんなにまで不便な土地に、人々は住んで来たのか、と言う点に向けられるであろう。」に対する答

えとなるのではないだろうか。

今後増えていくであろう「むらじまい」の際に歴史文化遺産について何も残せないのであれば、その地域がもつていた魅力が永遠に失われてしまう。地域の魅力を掘り起こし、伝え継いでいくためにはどうすればいいのか考えていきたい。

註

(1) 熱田の北、新屋との間に備そなえという集落があるが行政区上は新屋の一部となっている。昭和四七(一九七二)年一二月に移転した。移転世帯は六世帯、人口は新屋の一部であったため行政区上は把握できていない。

参考文献

- 『香美町人口ビジョン 第2版』香美町 二〇一九
- 『香美町寺社建築調査報告書』香美町歴史文化遺産活性化実行委員会 香美町教育委員会 二〇二三
- 『日本歴史地名体系第二九巻Ⅰ 兵庫県の地名 Ⅰ』平凡社 一九九九
- 福田恵「近代山村における林業移動と人的関係網—広狭域に及ぶ山村像の把握に向けて—」『現代社会は「山」との関係を取り戻せるか』年報 村落社会研究 第五二集 日本村落研究学会 二〇一六
- 『小城追憶—小城民俗調査報告書—』香美町歴史文化遺産活性化実行委員会 二〇一四
- 古川哲男『矢田川流域の金属生産遺跡 宝の山と谷』村岡歴史研究会 二〇一〇
- 『おじろに生きる』美方町産業課 一九八四

川見時造『但馬の木地屋』神戸新聞出版センター 一九八六

『美方町史』美方町 一九八〇

『郷愁小長迪』村の記録「小長迪」を綴る会 美方町 一九九五

『小代 小代地区民俗資料緊急調査報告書』兵庫県教育委員会

一九七〇

石松崇「地域の歴史文化遺産を継承するために——香美町「ふるさとガイ

ド」の取組——」『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年

報 Link 第5号』神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

二〇一三